

ギリシャを旅して

碁楽連会長 竹島正義

この10数年来、毎年一度は夫婦で海外への旅を楽しんできた。1週間以上プライベートの旅をする時間的な余裕かできてきたことと、やはり少しでも見聞を広めたいという気持ちがあったからだろう。ほぼ30カ国を歩いて、物理的なことばかりでなくそれぞれの国民性など、さまざまな事柄を肌で感じてきたことは、なんとなく視野が広がる思いがする。

昨年は、11月半ばにギリシャへのツアーに参加した。ギリシャは、日本の3分の1ほどの国土に約10分の1の人口である。首都アテネに全国の3割以上の人たちが暮らしているという。全人口の約1割という東京よりはるかに大きな集中度である。主に東のエーゲ海に散在している島の数がおおよそ3,000というから、大きな観光資源で



アクロポリスの丘からのアテネの眺め
ある反面、行政も手のかかることであろう。アテネの気温は東京とほぼ同じように感じられたが、雨量は少ないようだ。国土全体に川が少ない。おそらく、雨が降るたびに地中に吸収されて、川となって流れる量が少ないのではないかと察せられる。

われわれ都市に生活する者にとって、やはり気になるのはアテネの街である。340万の人たちが暮らすだけに、市街地は、超高層の建物はほとんど見かけなかったが、かなり大きく交通も過密である。細網道路は、ほとんど一方通行で、その両側に駐車するから車は中央部を1台ずつしか走ることができない。駐車場はほとんど見かけることは



古代野外劇場

なく、埃だらけの廃車寸前と思われるような車が平然と車道に鎮座している。聞けば、路上駐車 OK とのことである。国産車はなく、すべて輸入車と聞いた。日本車はざっと見たところ 25%前後だろうか、トヨタのタクシーが多いのは燃費のせいだろうか。桑の木が街路樹として植えられているのは面白い。養蚕が盛んなようだからと、頷ける。

ギリシャといえば、やはり遺跡の国である。アテネの市街地にあるアクロポリスの神殿と周辺の野外劇場などの施設、古代オリンピックの開催されたオリンピアの遺跡など古代の歴史を物語る多彩な遺跡には本当に驚くばかりである。日本ではおそらく穴居生活をしていただけであろう 2500 年の昔、地上に 10 メートルの石柱を立て、しかも人物像など豊かな装飾を施した建造物を建てた土木、建築の技術、そして今なお夏の演劇などに使用されている野外劇場などは、ローマのコロッセオなどとともにヨーロッパの技術の先進性を物語るのだろう。しかし、さすがに世紀以前のもの



アテネとペロポネソスを結ぶ運河

の多いだけに、あるいは戦火により、あるいは地震などにより地上のものは失われたのが少なくないのは残念なことであった。もうひとつ、世界遺産になっているメテオラの修道院は数百メートルの一枚岩かと思われるような垂直な奇岩の頂上に立つ。かつて、宗教的な迫害を逃れるために人間を寄せ付けない山上に修道院を建て修行に励んだということである。今でこそ簡単に山上に立つことかできるものの、1000 年の昔の修道僧の苦勞を思うと、その熱烈な求道の心に感動を覚えざるを得ない。

最後に日常生活の話。南欧人は、ヨーロッパ人としては小柄なようではあるけれど、東洋人よりは大柄なだけに、出される食事の量は多い。しかし、味付けはどこへいっても雑な印象を受ける。飲料水は、ガイドの薦めるままにミネラルを飲みとおしたが、時折口にした水道水は、私の口に合って結構おいしく感じたし、問題はなかった。東南アジアの水道と違って、危険なわけではないの

で、神経質になる必要はなさそうだ。街中の八百屋、果物屋の商品を見ると、他の国々と同じように、日本では自家用にしかないような粗末な物を山積にして売っている。リンゴを磨いて店頭に並べるという日本の売り方が異常なのであるか？

海外旅行は、国内旅行と違った楽しさが多いが、加齢とともにやはり健康状態の持続という点で不安を伴うことがある。今度のツアーで、バス酔いで不調を訴える人もいた。いつまで続けられるか体力維持にがんばりたいものである。

(暮楽連だより 第 187 号 発行日 2007 年 2 月 17 日)